

アジア研究教育ユニット 令和4年度教育研究報告書

事業課題名	非常勤講師任用
代表者名	伊藤正子
事業概要 (600字程度)	<p>東南アジア諸国はそれぞれ独自の国家語を有し、多くの国では日常生活のみならず大学においてもそうした国家語が使われている。そのため学生が東南アジアへの理解を深め、また有意義な学術交流を行う上では、東南アジアの言語の習得が不可欠である。本事業では、ベトナム語を対象にこの能力を向上させ、現地大学とのより有意義な人材交流に資することをめざす。特に、基本的な文章読解能力と初級会話能力の涵養に重点を置き、受講者の習熟度に応じて柔軟に対応する。「ベトナム語 II(初級)」として、ベトナム語教授の経験豊富な吉本康子氏が担当し、講義は、後期分の実施とする。</p>
成果の概要 (800字程度)	<p>本事業では、受講者数は、文学部学生が4人、総合人間科学部1人、大学院生はAA研究科1人であった。前期に比べると減少したが、後期まで続けた学生は皆きわめて熱心であった。留学生や実習生として多数のベトナム人が日本にやってくるようになった現在、ベトナムは非常に身近になり、関心をもつきっかけも増えていることが背景にあるだろう。</p> <p>学部生では、国内に急増しているベトナム人とのコミュニケーションを目的とする以外に、日本語との違いを対照言語学的に学ぼうと受講した学生もいた。また多文化共学短期派遣留学プログラムが再開されたため、ベトナムに関心をもって受講した学生もいた。</p> <p>大学院生は、急速なIT化と人々の意識の変化など、ベトナムにおける社会的な問題について関心を持ち、将来の研究活動に備えてベトナム語能力の向上を目的に受講していた。受講学生のベトナム語の運用能力は本事業を通じて、着実に向上してきた。</p> <p>なお、ベトナム語は発音が特に難しい言語であり、外国語として学習する場合、発音を真似るためには、教員の口元を見る必要がある。そのため、あえて対面授業とはせず、ZOOM授業によりマスクをつけずに、思う存分発音をすることを重視した。</p>